



神の国の希望

シリーズ～神の国～

2013/5/12 母の日

ルカによる福音書7章11～17節

それから間もなく、イエスはナインという町に行かれた。弟子たちや大勢の群衆も一緒であった。イエスが町の門に近づかれると、ちょうど、ある母親の一人息子が死んで、棺が担ぎ出されるところだった。その母親はやもめであって、町の人が大勢そばに付き添っていた。

主はこの母親を見て、憐れに思い、「もう泣かなくともよい」と言われた。そして、近づいて棺に手を触れられると、担いでいる人たちは立ち止まった。

ルカによる福音書7章11～17節

イエスは、「若者よ、あなたに言う。起きなさい」と言われた。すると、死人は起き上がってものを言い始めた。イエスは息子をその母親にお返しになった。

人々は皆恐れを抱き、神を賛美して、「大預言者が我々の間に現れた」と言い、また、「神はその民を心にかけてくださった」と言った。イエスについてのこの話は、ユダヤの全土と周りの地方一帯に広まった。

大工であったイエス様

- 当時の大工は、道具を抱えて町から町を旅し、家々の必要に応じて収入とした
 - 家の建築や補修、家具の製作、修理などを行った
 - 現代のように建築会社に雇われたり、工務店を構えて注文を待っていたりしたわけではない
- 特にガリラヤの町や村にはしばしば訪れており、顔見知りの人も多かったと思われる
 - ナインはイエス様が暮らされたナザレから10kmほど南の町で、イエス様は何度も訪れていたのでは？

やもめにおとずれた悲劇

- この時代、夫に先立たれた女性には収入の道がほとんど無かった
 - 律法には「落ち穂拾い」の権利が約束されているが…
- この女性にとっては、「一人息子」は唯一のそして最大の希望であったに違いない
 - 息子が成人して働けるようになるのを夢みながら、必死で暮らしてきた
- その息子に死なれた母の悲しみは…
 - 町の人もそれを知っていたので大勢が葬列に加わった
 - 母は棺にとりついて号泣していた

やもめの子であったイエス様

- イエス様もやもめの子であった
 - イエス様の父ヨセフは早くに他界し、長男であったイエス様が大工の仕事を受け継いで、一家を支えた
- 彼女の悲しみを知っていたイエス様は「憐れに思」われた
 - 「憐れに思う」と訳されている言葉は、言語では「**内蔵が揺さぶられる**」という意味である
 - もしかするとこの親子と面識があったかも？
- 「**もう泣かなくてもよい**」と言われたイエス様
 - 母の涙を何度も見てこられたのかもしれない

母に返された息子

- イエス様は自ら近づいて、棺に手を触れられた
 - 悲しい結末に向かっている隊列を止められた
- よみがえった息子
 - イエス様が「若者よ、あなたに言う。起きなさい。」と命じられると、彼は起き上がり、「ものを言い始めた」!
- 母に返された息子
 - 母は再び生きる希望を与えられた
- 人々は恐れ、神を賛美した
 - 「神はその民を心にかけてくださった」と言った

神の国の希望

- 神は私たちの涙を見過ごしにされない
 - 母の涙が報われる国である
- 神の国とは、神の「**憐れみ**」が満ちた国
 - 神は私たちの悲しみや苦しみをご存じであり、深く同情しておられる
 - イエス・キリストは、そのことを啓示し、実行するために人となられ、「神の国は近づいた」と宣言された

神の国の希望

- 神は私たちの涙を見過ごしにされない
 - 母の涙が報われる国である
- 神の国とは、神の「**憐れみ**」が満ちた国
 - 神は私たちの悲しみや苦しみをご存じであり、深く同情しておられる
 - イエス・キリストは、そのことを啓示し、実行するために人となられ、「神の国は近づいた」と宣言された

わたしは彼らの嘆きを喜びに変え
彼らを慰め、悲しみに代えて喜び祝わせる。

〈エレミヤ書31:13〉